第１章●補益と補養剤

③血虚と補血剤

人体を大きく気・血と捉えると、「血」は「物」であり物質的基礎を意味する。「気」は働きであり「機能」であって、健康とは気・血の調和のとれた状態である、と言われる。

「血」という概念、「血虚」という概念は、この言葉の意味するところが古代から色々と変遷している。

四物湯は四君子湯と並ぶ重要な基本処方である。気虚の基本処方が四君子湯なら、四物湯は「血虚」の薬、血虚の基本方剤と言われる。では血虚とはどういう病態を指すのであろうか。 気虚と四君子湯は比較的実際とは符合する。それに対して四物湯と血虚の関係は複雑である。しかも、四物湯の使い方は時代とともに変化し、適応範囲が広がってきているのである。そして四物湯を理解することが、血虚を理解することになる。歴史的に血虚の方剤として四物湯がどのように変遷しているかを明らかにしなければ、四物湯そのものが理解できないし、自由に使いこなすことができない。四物湯は血虚の基本方剤で、単独で使用することは少なく、加減し、合方し、また四物湯を含んだ方剤として用いられる。この複合方剤の中での四物湯がどういう意味であるかも参考にして判断し、実際の臨床の中から四物湯の適応症をつかまねばならない。

現在の中医学では、「血」を現代医学の「血液」と結びつけて、同じように解釈しようとする傾向がある。これは臓腑についても全く同じである。しかし、古人の考えた臓腑と現代医学の臓腑とは全く別物であるのと同じように、「血」と「血液」とは決して同じではないのである。臨床的には大出血や急性の貧血のみならず、慢性の貧血でも、四物湯を用いると必ず病人は弱るのである。そして大切なことは、「血虚」というものは「貧血」とは全く関係がないということである。

山本巌先生は、臨床の実践から「“血”という概念、“血虚”ということ、

これらの意味するところが、古代から色々と変遷している。現在の中医学では、“血”を現代の“血液”と結びつけて、同じように解釈しようとする傾向がある。しかし“血”と“血液”とは決して同じではないのである。そして大切なことは“血虚”というのは“貧血”とは全く関係がないのである。血虚も四物湯も複雑なものである。血虚とは、血が足りないとか、物質的基礎の足りないということよりも、血虚の内容は種々の病態を含み、主として自律神経および内分泌系の失調を指しているように思われる」と述べられている。

血虚の基本方剤である四物湯の歴史的展開をみてみると、**（表 1）**に示すような三段階を経て四物湯の適応する血虚の病態が拡大している。

（表 1）四物湯における適応病態の歴史的展開

第一段階	**婦人の性器出血に対する止血剤としての四物湯『金匱要略』**
	芎帰膠艾湯（四物湯加艾葉、阿膠、甘草）
第二段階	**婦人の聖薬としての四物湯『和剤局方』**
	四物湯を月経異常、妊娠中、出産・産後に用いる
第三段階	**血虚の基本方剤としての四物湯**
	❶皮膚の老化、萎縮に用いる ❷四肢の運動麻痺、知覚麻痺、筋肉萎縮に用いる ❸栄養障害、脱水に用いる ⓐ慢性疾患で、栄養が衰え、皮膚はカサカサ、筋肉は痩せる ⓑ新陳代謝の亢進による陰虚体質 ❹血虚の熱に用いる

それでは次に血虚という病態に診られる症状、その特徴、血虚の基本方剤である四物湯を初めとする治療方剤について述べてみる。

血虚の症状

❶体が痩せて細い。体に潤いがない。筋肉が痩せ細り、爪も弱くなる。
❷皮膚につやが無く、カサカサして、シワがあり、皮膚が痩せて、皮下脂肪が少なくなる。皮膚の色が汚い。
❸脈が細い。
❹舌が細くしまり、どちらかといえば乾燥している。
❺尿量も少なく、大便の量も少ない。

血虚の特徴

❶大体において消化吸収機能は良く、よく食べられる。同化作用より異化作用が強い。したがって気虚を伴っていない限り元気である。しかも食べても太らない。即ち食べて同化する量よりも、消費するエネルギーのほうが多い。また体内の水分も少ない。

❷皮脂の分泌の悪いものも血虚と言う。皮膚が乾燥しているのは、血が少なく皮膚に栄養が行きわたらないためと古人は考えた。当帰、地黄など補血薬は潤肌の作用がある。皮脂の分泌を良くして皮肌が滑らかになる。

❸血虚を貧血と解釈するのは誤りである。出血して貧血が起き、血漿の蛋白質が減少すれば浮腫を生じ、色は蒼白になり、体はむしろ水分が多く、気虚となる。血虚の乾燥(枯燥)とは反対になる。

血虚の治療

血虚の治療には補血薬を主に組まれた補血剤を用いるが、その代表方剤は四物湯である。

［補血薬］　熟地黄、当帰、何首烏、阿膠などを配合して用いる。

［補血剤］　四物湯、当帰補血湯

［気血双補剤］　十全大補湯、人参養栄湯

四物湯＝当帰、川芎、芍薬、地黄

補血剤（血虚を治す）…老化防止、造血、調経、止血作用などがある。

Group：**四物湯、芎帰膠艾湯、温清飲、竜胆瀉肝湯**（一貫堂）**、芎帰調血飲第一加減、当帰飲子、十全大補湯、独活寄生湯、疎経活血湯**

四物湯	**当帰、川芎、芍薬、地黄**
芎帰膠艾湯	**当帰、川芎、芍薬、地黄**（阿膠、艾葉、甘草）
温清飲	**当帰、川芎、芍薬、地黄**（黄連、黄芩、黄柏、山梔子）
竜胆瀉肝湯	**当帰、川芎、芍薬、地黄**（黄連、黄芩、黄柏、山梔子、連翹、薄荷、木通、防風、車前子、竜胆、沢瀉、甘草）
芎帰調血飲第一加減	**当帰、川芎、芍薬、地黄**（白朮、茯苓、陳皮、烏薬、香附子、牡丹皮、益母草、大棗、乾姜、甘草、桃仁、紅花、牛膝、枳殻、木香、延胡索、肉桂）
当帰飲子	**当帰、川芎、芍薬、地黄**（白蒺藜、何首烏、防風、荊芥、黄耆、甘草）
十全大補湯	**当帰、川芎、芍薬、地黄**（人参、白朮、茯苓、甘草、黄耆、肉桂）
独活寄生湯	**当帰、川芎、芍薬、地黄**（人参、茯苓、甘草、生姜、独活、防風、秦艽、細辛、桂枝、桑寄生、杜仲、牛膝）
疎経活血湯	**当帰、川芎、芍薬、地黄**（陳皮、生姜、甘草、茯苓、蒼朮、防已、羌活、防風、白芷、威霊仙、牛膝、桃仁、竜胆）

▶**四物湯**『和剤局方』

（解説）●本方は『和剤局方』に「栄衛を調益し、気血を滋養し、衝任の虚損によって月水調わず、臍腹疞痛、崩中漏下し、血瘕塊硬を生

じ、発歇疼痛、妊婦は宿冷によって将に宜しきを失し、胎動不安、下血不止、及び産後の虚に乗じて風寒内に拍ち、悪露下らず、結して瘕聚を生じ、小腹堅痛、時に寒熱を作すを治す。」とある。このように『和剤局方』の四物湯は、『金匱要略』の芎帰膠艾湯から阿膠、艾葉、甘草を除いてつくられたもので、止血を目的とする芎帰膠艾湯から四物湯に展開することで月経不順、月経痛など下垂体・卵巣の機能失調や自律神経の異常に広く適応させることができるようになり、更に女性だけでなく男女とも血虚を改善する処方へと認識が変化したのである。

◉「血虚」の病態はかなり複雑で単一な状況に帰納しがたく、四物湯を用いる病態も様々で一括して捉えることは難しい。ただ、赤血球・血色素などには無関係であり貧血ではない。自律神経系、内分泌系の失調を基礎にするものが多い。

◉四物湯は血虚に対する基本処方であり、いろいろの処方に配合して用いられる。

（応用）**❶出血**

四物湯にも地黄、芍薬など止血に働く薬物が含まれているので、ある程度の止血効果は期待できるが、出血が強いときは阿膠、艾葉などを加えた芎帰膠艾湯が用いられる。

ⓐ精神的ストレスを伴う出血

胃・十二指腸潰瘍、潰瘍性大腸炎などのストレス性潰瘍の出血には、向精神薬を配合する。不安や抑うつには紫蘇葉、香附子などを、緊張、イライラには柴胡、白芍などを、怒りっぽいときには黄連、山梔子などを配合した処方を用いる。

例えば胃潰瘍の出血には、小柴胡湯合四物湯を用いるか四逆散（解労散）合四物湯を使用する。また、三黄瀉心湯、黄連解毒湯を用いるか、四物湯と合方した温清飲を用いる。

ⓑ炎症性の出血

女性性器の炎症で血性帯下が診られ、口乾、尿量が少なく濃い、

舌質が紅、脈は数のときは、熱盛によるもので、黄連解毒湯、三黄瀉心湯などを用いる。ただし、慢性化した暗赤色の帯下には一般に四物湯に黄連解毒湯を合方した温清飲を用いる。

ⓒ冷えに伴う出血

身体や四肢が冷え、口渇がなく、尿量が多い、舌は淡紅で湿潤し、脈が遅などの寒証を伴うときは乾姜、附子を加える(苓姜朮甘湯などを合方する)。

ⓓうっ血による出血

うっ血による出血には、桃仁、紅花、牡丹皮、桂枝などの活血化瘀薬を加える(桃紅四物湯)か、桂枝茯苓丸などを合方する。

❷月経異常

性器出血に芎帰膠艾湯を使用しているうちに、月経や産後の異常にも効果があることが分かり、婦人の聖薬として『和剤局方』の四物湯が出現したと考えられる。また、内分泌系、自律神経系の失調を正常化することも次第に明らかになっている。

四物湯の基になる処方として芎帰湯(当帰、川芎)があり、分娩時によく用いられた。破水すると服用させて陣痛を促し、胎盤が残留したときや、悪露が止まらないときにも服用させた。産科技術の進歩した現在では使用する機会は少ないと考えられるが、四物湯の方意を知るうえでは参考になる。当帰は、月経痛、月経不順、無月経を改善し、子宮の発育を促進する。川芎は無月経、稀発月経、稀少月経に用い、産後の弛緩した子宮を収縮させる。生薬の正確な薬理作用はつかみにくいが、当帰、川芎、地黄などは内分泌系や自律神経系に作用して月経異常を正常にする効果があるらしい。

月経異常に対し、日本では『万病回春』の加減法がよく用いられるので参照されたい。

ⓐ月経周期が長い場合

基礎体温が低く月経周期が延長するものは寒証であり、桂枝、

附子、呉茱萸など温経薬を加える。温経湯の加減がよい。

ⓑ月経周期が短い場合

周期の短いのは熱証で、出血量の多いときは、黄連、黄芩などを加える(温清飲の加減を用いる)。

ⓒ過少月経の場合

月経血量が少なく月経痛があるもの、月経周期が不定で延長傾向のあるものは瘀血である。桃仁、紅花などを配合し、腹痛には延胡索を、熱証を伴うときは黄連などを、寒証を伴うときには桂枝を加える(桂枝茯苓丸や桃核承気湯を合方する)。

ⓓ肥満者の月経不順

肥満(水太り)し、月経血量が少なく色が薄い者は湿盛である。二陳湯や半夏、天南星などを加えるとよい(半夏厚朴湯を合方する)。月経痛には当帰芍薬散を合方する。

ⓔ精神的ストレスを伴う場合

四物湯に香附子、烏薬、紫蘇葉、鬱金、柴胡、青皮などを加えて用いる(小柴胡湯や香蘇散を合方する)。

❸皮膚疾患

皮脂の分泌が悪く皮膚が乾燥したものに用いる。痒みがあるときは、防風、荊芥、白蒺藜などを加えた当帰飲子を用いる。慢性の炎症には、黄連解毒湯を加えた温清飲や竜胆瀉肝湯(一貫堂)を用いる。

❹運動麻痺、骨・筋肉の萎縮(老化現象)

ⓐ産後の血脚気

産後に現れる下肢の運動麻痺を産後の血脚気と言うが、これらに四物湯の加減(芎帰調血飲第一加減など)を用いる。

ⓑ中風、脚気、骨の変形、筋肉の萎縮などの老化予防

中年を過ぎると脊柱および軟骨、筋肉、結合組織などの支持組織に老化現象が起きてくる。これに風、寒、湿などの外因が作用すると筋肉の疼痛、拘縮、運動障害、こわばり、動作がにぶい、

関節の変形、浮腫、水腫、屈折時の痛み、腰痛などの症状が発生する(骨粗鬆症、変形性関節症など)。これらの症状に補陰湯、独活寄生湯、疎経活血湯、大防風湯などを用いる。

ⓒ貧血、白血球・血小板減少症

四物湯は骨髄での幹細胞の造血作用がある。貧血症や白血球減少症の者は気虚を伴うことが多いので十全大補湯などを用いる。

❺発熱(陰虚)

痩せて水分が少ない人(陰虚)の発熱に、四物湯に知母、黄柏を加えて用いる。滋陰降火湯もこの類方である。熱病で黄連解毒湯を用いる状況でも、陰虚のものや慢性化した場合は、四物湯を合方した温清飲や竜胆瀉肝湯(一貫堂)を用いる。

▶ **芎帰調血飲第一加減** ⇒ 310 頁の本方の解説を参照されたい。

▶ **当帰飲子**『外科正宗』

(解説) ◉本方は『外科正宗』に「当帰飲子、血燥きて皮膚瘙痒を作し、及び風熱瘡疥の瘙痒、或いは疼痛を作すを治す」とある。本方は当帰、川芎、芍薬、地黄の四物湯で血を養い、これに何首烏を加えて、萎縮した皮膚を回復させ皮膚を潤す。黄耆は皮膚の機能を亢めて、皮脂の分泌を良くし、皮脂欠乏を補う。白蒺藜、防風、荊芥は皮膚の機能を補うと同時に瘙痒感を除く。

(応用) **皮脂欠乏性皮膚炎、老人性皮膚瘙痒症**

老人になり、冬季に皮脂の分泌が悪くなり、皮膚に皺ができ、皮膚の老化が始まる。単なる老人性の皮膚萎縮、乾皮症なら、四物湯や六味丸、八味丸などで皮膚の萎縮を防げばよい。更に、皮脂の分泌が欠乏し、白色の落屑が始まり、瘙痒が起きるようになると本方を用いる。

▶ **十全大補湯**『和剤局方』

(解説) ◉本方は働きと元気を補う四君子湯と物を補う四物湯、それに補気の黄耆と冷えを温め血行を良くする肉桂を加えたものである。肉桂に当帰と黄耆を加えると肉芽の増殖が非常に促進され、難治

性潰瘍(褥瘡)が良くなる。小建中湯に当帰と黄耆を加えた帰耆建中湯もこの目的でつくられた。

(応用) **❶補中益気湯を使う目標で、更に痩せて枯れて冷えやすいもの**

皮膚が萎縮して皮脂の分泌が悪い、骨も筋肉もみんな枯れて痩せたものに用いる。

❷褥瘡、カリエス

肉芽ができてこない、創傷の治癒が悪いものに用いる。

❸運動麻痺、骨・筋肉が萎縮した者(老化現象)

老化に伴って背中が曲がって腰が痛くなるとか、膝の関節が痛んで筋肉萎縮が起きて動きが悪いというものなどに、十全大補湯の加減方である独活寄生湯、補陰湯、大防風湯などを用いる。

❹貧血症、白血球・血小板減少症

四物湯は物を補う(骨髄での幹細胞の増殖)作用があるが、貧血症、白血球減少、血小板減少は機能の低下(気虚)を伴うため本方が用いられる。

▶補陰湯『衆方規矩』

(組成) 当帰、芍薬、熟地黄、生地黄、補骨脂、杜仲、牛膝、小茴香、知母、黄柏、陳皮、茯苓、甘草、大棗

(解説) ◉本方は四物湯に四君子湯を合方し(八珍湯)、気血即ち気力、体力を双補して老化による筋力・骨などの衰えを補い、杜仲、破故紙、牛膝で筋骨を強くし、老化して疲労したことによる腰痛、特に寝腰といって朝起た時に腰が痛くて起きられないというものに有効である。

◉本方の特徴は、生地黄、知母、黄柏を加え、痩せて熱がある虚熱に対する配慮がされているところにあり、独活寄生湯が水滞と寒に対する処方であるのに対し、水太りでなく痩せて乾いた陰虚の体質で、手足ことに下肢(特に足の裏)の煩熱を訴えるものに適している。独活寄生湯と反対になる。

▶**独活寄生湯**『千金方』

（組成）当帰、川芎、芍薬、地黄、人参、茯苓、甘草、生姜、独活、防風、秦艽、細辛、桂枝、桑寄生(or 続断)、杜仲、牛膝

（構造）❶当帰、川芎、芍薬、地黄(＝四物湯)…栄養を補い、血行を良くして骨や筋肉の萎縮を防ぐ。更に、骨や筋肉を丈夫にして老化現象を防ぐ。

❷人参、茯苓、甘草(＝四君子湯去白朮)…消化吸収機能を亢めて元気にする。

❸杜仲、牛膝、続断、桑寄生…骨、筋肉を強くする。

❹独活、秦艽、細辛、茯苓、威霊仙…体の湿、水滞を除いて風湿寒による疼痛を防ぐ。

❺当帰、川芎、桂枝、細辛、乾姜、防風…血行を良くして体を温め、寒や冷えによる疼痛、麻痺を改善する。

（解説）◎本方は補血の四物湯が基本で、これに補気の四君子湯を加えた八珍湯が中心となる。 杜仲、牛膝、桑寄生、続断は筋肉や骨を強くする。桂枝、乾姜、細辛、当帰、川芎は末梢の血行を良くして体を温め、寒による疼痛・麻痺を改善し外部からの寒邪も除く(寒証が強いときには附子を加える)。独活、秦艽、細辛、茯苓は体の湿や水滞を除去する。去風の防風、桂枝、細辛などは、皮膚などの表面的な知覚麻痺や疼痛に有効である。

◎したがって、本方は腎虚即ち人体の老化を基礎として、脊柱や支持組織の老化、萎縮、変形などがあり、内因として湿、水滞のある冷え症のもので、それに更に外因の風・寒・湿の邪に犯されて発病した腰痛、腰脚から膝にかけての疼痛や知覚・運動障害、関節の疼痛・腫脹、脳血管障害による運動麻痺などに用いられる。

◎一般には以下の状況に用いるとよい。

（応用）❶**腰痛**

中年以後の腰痛に対するファーストチョイスの処方である(『衆方規矩』では腰痛のファーストチョイスに挙げている)。

中年を過ぎると脊柱および軟骨、筋肉、筋膜、結合組織など支持組織に老化現象が起きてくる。立位をとる人間では、特に脊柱や姿勢に変形・ひずみが生じ、血行障害・神経の圧迫などの影響を受けて腰痛が発生する。

このような老化に対する処方には、六味丸、八味丸、四物湯、八珍湯、十全大補湯などがあり、日本の古方家は老化による軽度の腰痛に八味丸をよく用いる。軽症で単純腰痛には八味丸でも効果がある。

独活寄生湯を用いる腰痛は、中年以後に多く、慢性の経過をとり体力が低下しており、冷えや湿をおびる水肥りの傾向のもので、労働による疲労が加わったり、湿気と寒冷に侵されて生じたものである。日本は湿度が高く水肥りのものが多く、夏も冷房で冷やすことがあるので、独活寄生湯が五積散と並んでファーストチョイスになる。

❷風寒湿痺

中年以降には、四肢の骨、関節、筋肉などに老化現象が起きてくる。これに風・寒・湿(特に寒と湿)の外因が作用すると、筋肉の疼痛、拘縮、運動障害、こわばり(関節リウマチの朝のこわばり現象の如く)、動作がにぶい、関節や脊柱の変形、浮腫、水腫、屈伸時の痛みなどの症状が発生する。

これらは、外部環境の寒冷、湿気、風などの影響で発病するので、西洋医学的には見落とされて、神経痛、筋肉痛、頚腕症候群などと病名がつけられる。この状況や変形性関節症などに用いる。特に、腰以下の疼痛、しびれ、運動障害、関節の腫脹・疼痛、脳血管障害による運動麻痺などによい。上肢の障害には防風、桂枝、威霊仙を加え、下肢なら牛膝、独活、秦艽を多くする。腓腹筋痙攣には木瓜、五加皮、木通を加える。

いずれも体力の低下が診られ、虚弱で動きも鈍い。決して丈夫で頑健な感じは受けない。本方は骨や筋肉を丈夫にして、老化現

象を防ぐ作用があり、老化現象による変形性脊椎症、脊柱管狭窄症、骨粗鬆症などに対して有効である。

▶**大防風湯**『和剤局方』

（組成）当帰、芍薬、川芎、地黄、人参、白朮、黄耆、甘草、生姜、大棗、杜仲、牛膝、防風、羌活、附子

（解説）●本方は栄養失調による運動麻痺に用いる。四物湯、十全大補湯を基本に杜仲、牛膝を加えて栄養と機能の低下（気血両虚）を補い、特に筋力の衰えを改善する。赤痢が流行した時代には、治癒した後にも栄養失調が残り、足背、膝関節などに浮腫があって大腿、下腿は痩せて細くなり、あたかも鶴の足のような観を呈したもので、これを「痢後の鶴膝風（痢風）」と言った。また、重症では起立も歩行もできない状態であった（「痿躄」と称した）。いずれも栄養失調のための筋肉の萎軟が原因で、栄養が回復すれば治癒するが、この状況に適している。

●このほか、脚気の麻痺や、大病後、産後、術後などの体力低下、栄養失調などで四肢の筋力がなく起立歩行が十分でないときにも用いる。尚、関節リウマチによる同様の状態も「鶴膝風」と名づけられるが、「痢後の」ものとは全く病理が異なる。関節の炎症には大防風湯は効かない。注意が必要である。

▶**疎経活血湯**『万病回春』

（組成）当帰、川芎、芍薬、地黄、陳皮、生姜、甘草、茯苓、蒼朮、防已、羌活、防風、白芷、威霊仙、牛膝、桃仁、竜胆

（解説）●本方は『万病回春』に「遍身走り痛んで刺すが如く左の足痛み、尤も甚だしきを治す。左は血に属す。多くは酒色によりて損じ傷れて筋脈空虚し、風寒湿熱を被り内に感じ、熱が寒を包む時は痛んで筋絡をやぶる。これを以って昼は軽く夜は重きに宜しく経をすかし、血を活かし、湿を行らすべし。これ白虎歴節風に非ざるなり」とある。

●本方は条文にあるように疔疔全身どこでも痛みが走り、刺すよ

うな痛みがある者に用いる。左が痿強く、また夜間に強くなる傾向がある。また、運動麻痺、脳出血の後遺症に用いる。酒色といって、元気で酒のみの中風に用いることが多い。

（応用）**❶血行障害（瘀血）からくる運動麻痺、疼痛**

元気で食欲も体力もあるため、人参、黄耆、白朮など補気薬は入っていない。老化や体力の低下はあまりない瘀血による疼痛に用いる。

❷脳出血後の後遺症による麻痺、運動麻痺

元気のよい酒のみの脳出血や脳軟化症の後遺症による痛みや麻痺に用いる。一般の中風には続命湯を用いる。

❸脳外科の手術後や外傷後の肩手症候群

❹パーキンソン症候群

半夏厚朴湯を合方して用いる。

山本語録

－四物湯とその周辺－

◎四物湯の起源と発展

四物湯というのは非常に有名で、いろいろな本に出ていますが、読んでみると書いてあることがみな違うわけです。しかも使うということはあまり書いてないんですね。一応、四物湯は中国の華佗が創った処方だと言われているんですが、華佗の『中蔵経』の中には出ていないんですね。だから本当に華佗が創ったかどうかは分かりません。ただし、もともとは『金匱要略』の芎帰膠艾湯であると言われているわけです。

◎芎帰膠艾湯の使い方

芎帰膠艾湯は『金匱要略』では婦人門に出ていて、三つの状況に使っています。一つは「婦人の漏下」つまり性器出血。その次に「半産後の下血」、これは流産とか早産の後で出血が止まらないときですね。その次は「胞阻」といって腹が痛んで下血するもの。胞阻というのは妊娠継続をストップするという意味ですから、今で言ったら切迫流産です。こういう三つの状況に使

うことになっています。性器出血、流産後の出血、切迫流産というように、すべての出血に使います。ただ、この中ではじめの性器出血には、瘀血によるものも気虚によるものもいろいろあるので、すべてが芎帰膠艾湯でうまくいくわけではないですが、私が使って一番よく効いたのは、切迫流産です。

●四物湯とその適応

四物湯ですが、出典としては『和剤局方』なんです。『和剤局方』というのは、宗の徽宗の時代に、各地方の勅命によってつくられたもので、非常にたくさんの薬物、方剤が載っています。四物湯は、ここに初めて出てくるわけです。四物湯の主治としては、「栄衛を調益し、気血を滋養し……」とあって、これはキャラメルの箱に「滋養豊富、美味絶佳」と書いてあるようなものじゃないかと思います。それから「衝任虚損による月水不調、崩中漏下……」と書いてある。崩中漏下というのは、山が崩れるがごとくダーッと出血するのが「崩中」で、雨が漏れるようにポチョポチョと出血するのが「漏下」です。そういうふうに、性器出血の婦人科疾患以外に、衝任虚損による月水不調つまり月経異常に用いる。衝任というのは衝脈、任脈のことで、これが妊娠とか月経とかを司っていると考えているんです。つまり自律神経系や内分泌系の異常によって起きてくる疾患、月経異常に使うようになっています。更に「胎動安からず、血下って止まざるもの」、「崩中過多」には阿膠、艾葉を加えると書いてある。つまり、芎帰膠艾湯のうちの当帰、地黄、芍薬、川芎の四つを四物湯にして、艾葉と阿膠を別個にのけてあって、出血過多の場合以外は四物湯を使うというふうになっているわけです。

●婦人の聖薬としての四物湯

四物湯は婦人科も産科もみんな使うと思います。四物湯だけで使うんじゃなくて、他の処方と合わせたり加減をしたりして使うようになると思いますが。今までは止血剤だったのが、恐らくこの時点で、婦人の聖薬になったと思うんです。出血の多いものでない限り、阿膠と艾葉を除こうと。地黄と芍薬、阿膠と艾葉は止血作用があるので血は止まる。そういう止血効

果以外に、内分泌異常による月経不順であるとか、生理痛であるとか、そういった婦人の疾患に対しても効果があるんです。恐らく、婦人の性器出血などに使っているうちに決して出血だけに効くんじゃないと分かってきたんじゃないかと思うんです。それで止血の部分だけは除いて四つでいろいろ加減していますね。『万病回春』なんか、四物湯の生理の加減といったら、十数種ぐらいあります。

●切迫流産と止血

これが切迫流産だ、胞阻だと判断するのは、妊娠中の出血があって陣痛様の腹痛が起きてきた場合で、芎帰膠艾湯を使うとパッと止血します。四物湯を用いる場合でも、四物湯を四味だけの狭義の四物湯として用いるか、ほかの薬物を加えた広義の意味で用いるかということで薬効が違ってきます。一番最後の文句に、「胎動して安からず」というのがある。胎動というのは、西洋医学の先生が考えている胎児の運動というのじゃなくて、流産するということです。「胎動して安からず、血下って止まず」というのは、流産です。流産の始まったときは阿膠と艾葉を加えると書いてありますから、昔からそういうふうに使っていたんだろうと思うんです。あえて逆らって、四物湯を使ってもいけるとは思います。地黄、当帰というのが、そういう作用をもっていると思います。

●逆の作用

四物湯は血を止めるのと逆に、生理を追い出す作用があるんです。四物湯に蒲黄を加えた四物一黄湯というのがあるんです。これは昔、堕胎に使ったんです。これは生理が止まったときに追い出すのに、非常によく効くんです。一本槍とかいう名前があるんです。……記憶があまり定かではないけれども。四物湯で生理を追い出すときには、四物一黄散を標準に使います。蒲黄は生と炙ったものと二種類あって、作用が違うんです。これは生でやるんです。炙ったら血止めになって、これは生だから押し出しになる。生と炙ったのと半々に使うのもあります。悪いものは出して、いいものは止めるんです。

●芎帰湯

四物湯は当帰、川芎、芍薬、地黄の四つから成っていますが、同

じ『和剤局方』の中に芎帰湯というのがあります。これは、川芎と当帰のたった二つです。何に使うかと言いますと、正常分娩で破水したときに使う。そうすると陣痛が強く起こってきてお産がうまくいくので、破水があってから服ませると書いてあるんです。もう一つ、益母草を五銭加えて佛手散にする。体が弱い気虚のときは人参を加える。普通は人参、紅花を加えて使うんですけれども、しかも難産の場合に、芎帰湯を催生に使う。生を催すと言う意味で、早目薬と書いてある。早く産ますために、陣痛微弱があるときでも使う。それから子供が生まれて、後産の出るときに使う。ということは子宮の収縮を速めて中のものを出すために、産後は必ず使います。

●当帰、川芎と芍薬、地黄

当帰と川芎を煎じて服ますとどうなるか、講習会をやったんです。私も服んでみたんですが、川芎というのはものすごくピリッと辛いんです。当帰は甘くてピリッとするんですけれども、両方合わせるとちょうどいい甘さになって、口当たりがよろしいんですわ。ウイスキーをいろいろ割ったときのように口当たりが非常にいいんだけれど、服んだら頭にきてねえ。のぼせるというか、顔はほてって赤くなるわ、目は赤くなるは、向こうを見たらボーッとなって、講演をしていても何をしゃべっているのか分からんですね。しまいにフワーッとなって、めまいがするんです。どのくらい服んだのか覚えていないんですよ。ただ、当帰と川芎は別々に服んだので、たくさん服んだんですわ。頭がボワーッとなってね。川芎、白芷は頭痛に使うんです。頭に血が上がっていいのかもしれないけれども、上がり過ぎるとめまいがするわけです。これはおかしいというわけで、今度は白芍薬を煎じて服むと、そのフワーッとくるのが止まります。

▶芍薬と地黄

もともとは婦人の聖薬で、婦人科だけに使っていたわけです。それが景岳あたりから婦人科だけでなしに、男もみな含めて自律神経、内分泌の異常に使われるようになってきたんです。しかも、血虚発熱というものに使うようになった。それで生地黄が入っているんじゃ

ないかと思うんです。熱の出るときに四物湯を使う。そういうことが起きてきて、血虚の中にまた熱が入ってくるわけです。そのあたりからいよいよ混沌として、分かりにくくなってくるんじゃないかと思います。

▶熟地黄と生地黄

生地黄、特に鮮地黄は止血と消炎、解熱に使う。鮮地黄を使えば、普通の熱はみんな下がります。あれは解熱剤であり、止血剤です。鮮地黄は局所的な止血効果もあります。

生地黄の解熱作用は中枢に作用して体温を下げるというのでなくて、体の細胞に作用して、新陳代謝を落として熱を下げる。キニーネという解熱剤は原形質毒で発熱を抑える。ゆっくり下がって、しかも発汗しないんです。これと同じようなものと考えています。生地黄というのは、だいたい便が軟らかい人に使うと下痢するからいけないと言うんですけれども、そうでないこともある。甲状腺機能亢進、いわゆるバセドウ下痢というのは止まらないんですが、昔は、甲状腺機能亢進症の場合に炙甘草湯を使ったんです。そうすると甲状腺機能が落ちて、下痢が止まる。私は炙甘草湯よりも、加減復脈湯のほうを使う。この中の肉桂とか生姜を除いて、牡蛎とか鼈甲を加えると効果がいいんです。そういうふうに地黄が熱を下げるのは代謝を抑えるところにあるんじゃないかと思います。感染症の熱でも生地黄を使うと、下がるのは下がります。この下痢は新陳代謝の亢進があって腸の蠕動運動が早くなって下痢するんです。だからそれを抑えると、下痢が反って止まるんです。地黄が腸の中に水分を貯えて、便が軟らかくなって下痢するタイプであるにも関わらず、むしろ止まる。

▶地黄の副作用の処理

四物湯を使うときに胃腸が悪いというような人にはそれを抑えるような薬を併用してやればいい。普通は四物湯加呉茱萸を使う。呉茱萸がなぜいいのかということですけれども、半夏のような止嘔作用というか、嘔吐を止める作用がある。茯苓のように胃内停水を取って水をさばく作用がある。それに枳実のように、胃内のものを下